

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：34429

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26284112

研究課題名(和文) モンゴル国現地収集史料等による13～14世紀モンゴル高原史の再構成

研究課題名(英文) The reconstruction of the history of the Mongolian plateau during 13th and 14th centuries

研究代表者

松田 孝一 (Matsuda, Koichi)

大阪国際大学・私立大学の部局等・名誉教授

研究者番号：70142304

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、従来通史の書かれていない13～14世紀、モンゴル帝国及び元朝時代のモンゴル高原の通史を、1994年以来現地で収集した史料およびその他の文献資料にもとづいて再構成するものである。本研究において現地調査史料としては、元朝のモンゴル高原行政政府の官僚リストを復元し、またモンゴル西部アルタイ県ハルザンシレグ遺蹟で発掘した遺物をC14分析を行い、同遺蹟が13～14世紀に活動していたことを確認し、また同遺蹟が13～14世紀の軍事拠点チンカイ城(屯田)と断定した。それら現地新史料の他、漢文、モンゴル、ウイグル、ペルシャ等の記録を利用してモンゴル高原の政治史、経済史等の通史を復元した。

研究成果の概要(英文)：This research aims to elaborate on the overlooked history of the Mongolian Plateau during the Mongolian empire (1206-1259) and the Yuan dynasty (1260-1388) based on archaeological materials collected in Mongolia since 1994 as well as on other sources. We clarified the bureaucratic structure of the regional government of the Mongolian plateau of the Yuan dynasty in 1347 from inscriptions. And based on a Carbon 14 radiocarbon analysis of archaeological materials from the site of the Khalzan shireg fortress in Gobi Altai province, we confirmed that the fortress date from the 13th and 14th century to conclude that the ruins are remnants of the Chinqai Balgasun of that time period. The study provide a comprehensive reconstruction of the political, economic, and other aspects of the history of the Mongolian Plateau during the 13th and 14th Centuries by utilizing these new primary source materials recovered in Mongolia and Chinese, Mongolian, Uyghur, Persian and other written records.

研究分野：東洋史

キーワード：モンゴル帝国 元朝 モンゴル高原 嶺北行省 カラコルム チンギス・カン クビライ・カアン 碑文

1. 研究開始当初の背景

モンゴル帝国史・元朝史はこれまで日本の研究者が、主として漢文史料、ペルシャ語資料をもとに世界の研究をリードしており、チンギス・カンの帝国の成立及び元朝の通史についての研究はそれぞれ高い研究成果があげられている。モンゴル本土に焦点を絞ると『元朝秘史』等の文献にもとづくチンギス・カンの勃興期の通史及び歴史地理研究、ヨーロッパ文献による首都カラコルムの研究など初期の歴史についての研究はある程度深められている。しかし、1260年のクビライ政権成立後(成立以前を「帝国期」(1206～1260)、以後を「元朝期」(1260～1388)と記す)の歴史研究は主として中国地域に焦点があり、モンゴル本土については個別事件史についての研究が断片的に蓄積されているだけであり、また帝国期と元朝期を結んだ通史はいまだ書かれていない。

通史の復元を阻んできたのは、帝国期、元朝期のモンゴル本土の歴史についての資料が少ないことがある。それを補うものとしてモンゴル本土現地での調査研究があり、内モンゴルでは戦前に現地調査の成果があげられたが、モンゴル本土の北部に当たる現在のモンゴル国での調査は、長くソ連の影響下にあり西側研究者には不可能であった。しかし1991年のソ連崩壊に伴い、モンゴル国は自由化され、広く西側の研究者に現地調査の門戸を開いた。研究代表者の松田孝一(大阪国際大学・名誉教授)はいち早く94年のモンゴル科学アカデミー東洋学研究所との共同研究をはじめとして、同歴史研究所、国立博物館、国際遊牧文明研究所と共同してモンゴル・日本共同碑文調査(通称「ピチェース(碑文)・プロジェクト」)を推進してきた。松田はこれまで「碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究」(基盤研究B,2000～2001年度)、「内陸アジア諸言語資料の解読によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究」(基盤研究B,2005～2007年度)、「新出土契丹文字資料・モンゴル文字資料に基づくモンゴル史の再構成」(基盤研究B,2011～2013年度)の研究計画を研究代表者として村岡倫(龍谷大学教授)、松川節(大谷大学教授)らと組織して、モンゴル国現地において漢文、モンゴル語、ペルシア語など多くの碑文・銘文、墨書、埋蔵文献の調査を行い、それらの研究により、既存の歴史文献では不明であった帝国期・元朝期のモンゴル本土の政治、軍事、経済、物流等の歴史像の復元を試みてきた。その成果として2013年に『モンゴル国現存モンゴル帝国・元朝碑文の研究』(オチルと共編)を公刊し、モンゴル史研究の新しい地平を現在も広げつつある。

また、白石典之(新潟大学)は、モンゴル科学アカデミー考古研究所との共同で1992年から行われたモンゴル帝国の創始者チンギス・カンの墳墓の位置を探るプロジェクト

以来、一貫して帝国期・元朝期のモンゴル国内における歴史遺跡の発掘調査を推進し、チンギス・カンの霊廟の同定と調査研究、モンゴル帝国の首都カラコルムの保存調査と歴史研究の第一人者として世界的に知られ、考古学調査を基礎に文献研究を総合して比類ないモンゴル帝国像をまとめた研究成果(『モンゴル帝国史の考古学的研究』、同成社、2002)がある。このように松田孝一を中心とする村岡倫、松川節らのモンゴル現地での碑文等の収集・研究、白石典之の考古学研究成果と実績、さらにモンゴル国各研究機関・研究者との間に確立された20年にわたる実績と信頼関係が本研究計画の背景にある。

2. 研究の目的

チンギス・ハンの勃興期から元朝滅亡期に至る13～14世紀のモンゴル高原地域(以下、モンゴル本土)の歴史は、前近代におけるユーラシア史の動向に大きな影響を与えた遊牧民族の歴史的活動の中でも最も明らかになっていると考えられている。しかし意外にもチンギス・ハン勃興期の他はカイドの乱など断片的な事件史が知られるだけで、政治、経済、交通物流、宗教などの動向は未だ脈絡ある通史として解明されていない。研究代表者松田孝一や分担者の白石典之らは、1990年代以来モンゴル国各方面の研究機関とそれぞれ日本・モンゴル共同調査隊を組織し、20年にわたり碑文・銘文、墨書・遺跡・埋蔵文物を調査した研究実績を有している。本研究計画はモンゴル現地ですらに同様の調査や遺跡の発掘を行いつつ、収集資料や発掘成果と東西歴史文献(漢文、モンゴル語、ペルシア語、ウイグル語、チベット語資料)を結合して同時期のモンゴル本土通史の再構成を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

モンゴル現地史料については、現地での調査、史料収集を続けるとともにこれまで得られた諸言語史料を整理、分析する作業を行った。また各研究分担者は13～14世紀の政治、軍事、経済、宗教などについて専門分担して、諸言語史料にもとづいて分析した。研究代表者は研究計画全体を総括しつつ、みずからも通史叙述を分担した。

4. 研究成果

研究代表者、研究分担者個々の成果は雑誌論文、著書や研究会議で公開するとともに、成果を総合した(A4判)ニューズレター(『13-14世紀モンゴル史研究』1号(125頁・2号(83頁))を刊行した。また毎年1回研究会を開催し研究成果を総括するとともに、初年度と2年度にはモンゴル側研究者を招聘して両国の成果の交換も行った。またモンゴル国での発掘調査の成果はマスコミへの発表会により広く公開した。以下、再構成した13-14世紀のモンゴル高原史の通史の概略を

述べる。(カッコ内「雑誌論文」は後掲の成果論文)

モンゴル帝国を建国したチンギス・カンは、モンゴル高原の各部族内の抗争や部族間の抗争に勝利して覇権を確立したと考えられている。しかし、それらの抗争の背後に金朝と中央アジアの西遼がモンゴル高原で支配権をめぐって対立しており、モンゴル高原の各部族や部族内は親遼派と親金派に分かれて争っていた点を解明した(著書 松田孝一担当部分, 雑誌論文)。

また、チンギス・カンの台頭のターニングポイントとなったのは 1196 年の金朝の対タタル遠征の決戦「オルズ河の戦い」への協力であった。この決戦への金軍の進軍経路は戦勝記念碑、セルベン・ハールガの岩壁銘文の判読によって解明された(雑誌論文)。

チンギス・カンは 1206 年に即位し、95 の千戸を諸子諸弟に配分し、モンゴル高原の東西に「ウルス(国)を作らせ(白石典之 2006, 川本正知 2013) それら諸子諸弟領の中間にチンギス・カン自身の本領が位置した(白石典之 2017)。この体制が以後、どのように継承、改変されたのかを解明することが帝国期、元朝期の通史のひとつの軸となる。チンギス・カンの死後、チンギス・カンの本領は、末子トルイがすべて継承したと言われてきたが、庶子コルゲンがチンギス・カンの本領、「大オールド」の地を分地としてウルスを形成したことが明らかにされた(雑誌論文)。

チンギス・カンの命令で大臣チンカイがモンゴル高原西方からウイグルistanへと続くアルタイ方面の駅伝路上に、農業、手工業生産基地(屯田)建設し、その中心にチンカイ城があったことが『長春真人西遊記』に記されているが、その位置は確定されていなかった。松田孝一、白石典之、村岡倫、松川節は、モンゴル国と共同でモンゴル西部ゴビ・アルタイ県、シャルガ郡ハルザンシレグ土城遺蹟とその周辺の清代農耕地一帯を 2001 年、2004 年に調査を行い、現地附近景観が、『長春真人西遊記』のチンカイ城附近景観と一致することを確認し、同遺跡とその一帯をチンカイ城、チンカイ屯田に比定してきたが、本研究課題で 2014 年に同遺跡の発掘調査を実施し、得られた骨片、木片の C14 年代測定により同遺跡がモンゴル時代(一部 5~6 世紀)に活動していたことが確定され、年代面からも比定はより確実となった(雑誌論文)。

第 2 代オゴデイ時代、帝国の首都カラコルムが建設され、情報伝達と物資輸送を担った駅伝制が整備された。駅伝制について本研究課題ではテレゲン道について現地調査を行い、大興安嶺沿いを北上する正確なルートが解明された(雑誌論文)。

元朝期のモンゴル高原の政治史は、クビライの正統性に異議を唱える中央アジアのモンゴル王族カイド陣営と元朝の抗争期とその終結後の前後二期に分けて考えることができる。

クビライの即位後、中国本土に首都が移されると旧首都カラコルムは「宣慰司都元帥府」という機関が設置された辺境の軍事拠点の位置づけとなり、その後、時期不明ながら「都元帥府」がアルタイ南へ移設され、カラコルムには「宣慰司」のみが残された(「宣慰司」関連:雑誌論文)。

元朝が構築したカイド陣営対策は、シリギの乱(1276~1282)で崩壊し、その後、1282 年にシリギの乱以来ジョチ家に抑留されていたクビライの子のノモガンが帰還して、「北安王」としてモンゴル高原に分封された(村岡倫 1985)。一時体制の立て直しが図られた。しかし、1287 年にモンゴル高原東部でナヤンの乱があり(吉野正史 2008) 1288 年から 1290 年にかけてカラコルム方面や大オールド地域までカイド陣営に侵攻され、元朝のモンゴル高原支配は打撃を受けた。

1290 年に元朝はカラコルムに「都元帥府」を再度設置し、1292 年、孫のカマラを晋王として派遣し、大オールドとモンゴル高原の支配を委ね、孫のテムルをアルタイに送ってバヤンら元朝軍の総領とし、元朝支配を再確立した。1294 年にクビライが死去し、テムルが即位した。この時期アルタイのチンカイの軍事拠点は元朝側にあり、さらに 1296 年カイド陣営からアリク・ブケの長男ヨブクル、モンケ家のウルス・ブカが元朝側へ帰順し、アルタイ方面は元朝側が確保する情勢にあった(村岡倫 2013)。

アルタイ山脈辺境に置かれた元朝の最前線の軍団の配置について、本研究課題で北からゲワルギス、ジュンクル、ナンギャダイ、ココチュの配置であったことが明らかとなった。1298 年カイド陣営の攻勢でこの元朝軍団は壊滅し、立て直しのために王族カイシャンが派遣されて 1299 年にアルタイのチンカイ屯田の地に駐屯した(雑誌論文)。

1301 年にカイドは元朝軍との戦闘で傷つき、死去した。カイドの死後 1303 年チャガタイ家のドアが中心となり、陣営は元朝に投降し、1304 年に全モンゴル王家の講和が一時成立した。1306 年に戦線はアルタイ以西へ移り、1307 年 100 万を越える人口が中央アジアからアルタイを越えてモンゴル高原へ流入した。ドアらの投降と同年にカラコルムに「兵馬司」が設置され、治安行政の整備が図られた。本研究課題では兵馬司設置の経緯と機能を解明した(雑誌論文)。

1303 年になおアルタイに留まっていた元朝軍の総領のカイシャンは、チベットのシャル寺に保護を与える命令文を送っており(Tumurtogoo2010) チベット仏教とアルタイ方面のつながりが示唆される(関連雑誌論文)。

流入民への食糧供給の中心として、1307 年、カラコルムに地方行政機関、「和林行省」(後の嶺北行省)が設立された(雑誌論文)。平和到来後、1303 年以後カラコルムへの中

国本土からの食糧輸送・供給は拡大した(松田 2010, 松川節・松井太 2013)。市域がこの時期大きく拡大した(白石典之 2002)のは、平和と大量の人口流入、経済的安定の結果であることは間違いない。

1316 年冬にカイシャン(武宗)の子コシラが、叔父のブヤント・カアン(仁宗)から逃れて父のかつての駐屯地のアルタイに至り、将軍トガチの保護を受けた。この「トガチの反乱」の際、カラコルムの嶺北行省などの官僚たちもほとんどがトガチ側に同調したことがカラコルムの碑文からわかる。乱は 1318 年に終息した(松井太 2013, 雑誌論文)。1316 年に廃止されていたチンカイ屯田が乱後の 1319 年、1320 年に再建、整備され、1323 年にはチンカイに「屯田総管府」が設置されている。トガチの乱時期、チンカイ地域は反乱側に陥り、乱の終息で元朝の支配が回復したのであろう。当時嶺北行省管轄下で 4748 戸 6400 頃という大規模な屯田がモンゴル高原全体(主要な場所はカラコルムとチンカイと考えられる)で経営されていた。

1330 年代にカラコルムに三皇廟、文廟、三靈侯廟が作られ、40 年代には勅賜興元閣(仏寺)をはじめイスラームのスーフイズム修道場(ハーンカー)などの寺廟が建築、修築されたことが日本モンゴル共同調査で収集された碑文資料(松田孝一 2013, 雑誌論文)から知られる。多数の宗教施設の建築、修築はカラコルムのこの時期の繁栄を示している。またハーンカーの修築に関わったムスリムのペルシア語人名のニスバにみられる地名は西アジア、中央アジアからカンパルク(大都)の地名があり、中には雲南の地名と判読できる可能性もあり(矢島洋一・磯貝健一 2013)。この時期広汎な帝国領各地のムスリムがカラコルムで活動していたことが知られる。

2014 年にハルホリン市内で 2 つの碑文断片が出現し、それらは従来知られていた脈絡不明の 5 つの碑文断片と接合することが判明し、「嶺北省題名記」(1347)という本来の一つの碑文として復元された(雑誌論文)。これによって同時期の嶺北行省の官僚リストが明らかとなり、「嶺北行省」の官僚機構の運用実態が明らかとなった(雑誌論文)。本研究課題では、この復元碑文を含めてカラコルムに関する碑文の内容の要点を整理して英語版で刊行した(雑誌論文)。

1368 年、明軍に大都を追われ北奔したいわゆる「北元」は、1388 年に天元帝トグス・テムルがアリク・ブケ家の末裔イエスデルに殺されて以後、モンゴル高原ではオイラト族の支援を受けたアリク・ブケ家、元朝の子孫、オゴデイ家の間の三つ巴の抗争の時代となり、明軍の侵攻を経てオイラトのエセンの時代に至ることが知られている(本田実信 1991)。

<引用文献>

川本正知(2013)、モンゴル帝国における戦争、山川出版社

白石典之(2006)、チンギス・カン“蒼き狼”の実像、中央公論社

白石典之(2002)、モンゴル帝国の考古学的研究、同成社

白石典之(2010)、チンギス・カンの戒め モンゴル草原と地球環境問題、同成社

白石典之(2017)、モンゴル帝国誕生 チンギス・カンの都を掘る、講談社

本田実信(1991)、モンゴル時代史研究、東京大学出版会、594-619、第 4 章、“On the Genealogy of the Early Northern Yüan.”(初出 1958)

松井太(2013)、和寧郡忠愍公廟碑、松田 2013、33-45

松川節・松井太(2013)、嶺北行省右丞郎中総官収糧記、松田孝一 2013、175-193

松田孝一(2010)、モンゴル帝国の興亡と環境、白石典之 2010、84-100

松田孝一(2013)、モンゴル国現存モンゴル帝国・元朝碑文の研究、大阪国際大学

村岡倫(1985)「シリギの乱 元初モンゴリアの争乱」『東洋史苑』24・25、307-344

村岡倫(2013)、モンケ・カアンの後裔たちとカラコルム、松田孝一 2013、91-121

吉野正史(2008)、ナヤンの乱における元朝軍の陣容、早稲田大学大学院文学研究科紀要、54、21-37

矢島洋一・磯貝健一(2013)、ヒジュラ暦 742 年カラコルムのペルシア語碑文、松田孝一 2013、237-266

Tumurtogoo D. (2010), *Mongolian monuments in Phags-pa script, introduction, transliteration, transcription and bibliography*, edited by D. Tumurtogoo; with the collaboration of G. Cecegdari, 《語言暨語言學》專刊, 42, Taipei, Institute of Linguistics, Academia Sinica, 28-30, The Edict of Prince Qaisan(1303)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 18 件)

松田孝一、「嶺北行省題名記」(仮題)の復元、13、14 世紀東アジア資料通信、査読無、23、2014、1-20

松井太、古ウイグル語行政命令文書にみえないヤルリグ、人文社会論叢(人文科学篇) 査読無、2015、55-81

村岡倫、『和林兵馬司劉公去思碑』より一元代カラコルム行政の一端、九州大学東洋史論集、査読無、43、2015、1-21

松田孝一、ハルザン・シレグ遺蹟等ゴビ・アルタイ県での調査、13-14 世紀モンゴル史研究、査読無、1、2016、1-8

松田孝一、西遼と金の対立とチンギス・カンの勃興、13-14 世紀モンゴル史研究、査読無、1、2016、51-65

村岡倫、チンカイ・バルガスと元朝アルタイ方面軍、13-14 世紀モンゴル史研究、査読無、1、2016、85-97

白石典之、斡里札河の戦いにおける金軍の経路、内陸アジア史研究、査読有、31、2016、27-48

矢島洋一、フレグのアラビア語のファルマーン(要旨)、13-14 世紀モンゴル史研究、査読無、1、2016、125-125

中村淳、敦煌莫高窟北区第 127 窟出土チベット語文書断片、13-14 世紀モンゴル史研究、査読無、1、2016、99-111

山本明志、碑文史料からみた嶺北行省(要旨・レジюме)、13-14 世紀モンゴル史研究、査読無、1、2016、113-122

松井太、蒙元時代回鶻仏教徒和景教徒的網絡、馬可・波羅 揚州 絲綢之路、査読無 2016、283-293

K.Matsuda, H.Muraoka, A. Ochir, T. Matsukawa, Y.Nakata, Mongol-Yapon Khamtarsan “Bichees” tosol, “Erdene-zuu” toshiin sudalgaani uldun, khetiin toloy, Heritage of Orkhon Valley, 査読無、2017-1、2017、6-15

松田孝一・村岡倫・松川節・中田裕子、2015 年モンゴル西部ホブド県における日本・モンゴル共同調査、13-14 世紀モンゴル史研究、査読無、2、2017、1-10

村岡倫、チンギス・カン庶子コルゲンのウルスと北安王、13-14 世紀モンゴル史研究、査読無、2、2017、21-35

白石典之、ツォグトバートル、テレゲン道復元のための基礎的研究、13-14 世紀モンゴル史研究、査読無、2、2017、15-53

中村淳、新発見ガンゼ=チベット族自治州档案馆所蔵チベット文法旨簡介、13-14 世紀モンゴル史研究、査読無、2017、55-70

Koichi Matsuda, The Stele of 14th Century Qaraqorum found at Erdene-zuu Monastery, 13-14 世紀モンゴル史研究、査読無、2017、37-43

(株)加速器分析研究所、ハルザンシレグ遺蹟における放射性炭素年代、13-14 世紀モンゴル史研究、査読無、1、2016、41-48

[学会発表](計 22 件)

Koichi Matsuda, Inscriptions of the Mongol Empire and the Yuan Dynasty in Mongolia, International Conference on Inscription Studies, 2014 年 8 月 11 日, Ulaanbaatar Hotel, Ulanbator, Mongolia

村岡倫、額爾迭尼招碑文所見元朝時代的哈刺和林、中国社会科学院民族学・人類学研究所、古文献研究室学術報告、2014 年 8 月 19 日、中国社会科学院 民族学・人類学研究所、北京、中国

Hitoshi Muraoka, Qara-qorum of the Mongol Empire Era as Seen from Chinese Inscriptions in Erdene-Zuu Temple, International Conference on Ten Years of the World Heritage site - Orkhon Valley Cultural Landscape: Past and Present, 2014 年 9 月 7 日, Kharakhorum Museum, Kharkhorin, Mongolia

村岡倫、チンカイ・バルガスと元朝アルタイ方面軍、2014 年研究報告会「モンゴル史研究の新展開」、2015 年 2 月 27 日、大谷大学、京都

松川節, The Reconstruction of Sino-Mongol Inscription of 1347 from Kharakhorum, International Conference on Ten Years of the World Heritage site - Orkhon Valley Cultural Landscape: Past and Present, 2014 年 9 月 7 日, Kharakhorum Museum, Kharkhorin, Mongolia

Yajima Yoichi, Ilkhanid Arabic Farmans, New Approach on Il-khans, 2014 年 5 月 23 日, National University of Mongolia, Ulanbator, Mongolia

矢島洋一、フレグのアラビア語ファルマーン、2014 年研究報告会「モンゴル史研究の新展開」、2015 年 2 月 27 日、大谷大学、京都

山本明志、モンゴル時代のチベット仏教カルマ=カギユ派、九州史学会大会、2014 年 12 月 14 日、九州大学、福岡

山本明志、碑文史料からみた嶺北行省、2014 年研究報告会「モンゴル史研究の新展

開」、2015年2月27日、大谷大学、京都

松田孝一、モンゴル帝国史の研究と調査 40年、内陸アジア史学会、2015年10月31日、京都外国語大学、京都

松井太、蒙元時代回鶻仏教徒和景教徒的網絡、国際学会「馬可・波羅 揚州 絲綢之路」、2015年9月18日、揚州會議中心、揚州

松井太、回鶻仏教徒在敦煌：敦煌諸石窟回鶻語銘文調査簡報、敦煌研究院學術講座、2015年12月3日、莫高窟敦煌研究院、敦煌、中国

松井太、黒城出土蒙古語文書和回鶻文書、内蒙古大学蒙古学学院學術講座、2015年12月7日、内蒙古大学、呼和浩特、中国

Matsui Dai, Network under the Mongol Empire as Seen in the Turco-Mongolian Documents Discovered from Central Asia, Global History Workshop; Globalization from East Asian Perspectives, 2016年3月15日、大阪大学、大阪

村岡倫、元朝時代モンゴル高原史点描～世祖末期から成宗時代を中心に～、2015年研究報告会「モンゴル史研究の新展開 II」、2016年2月26日、大谷大学、京都

松川節、『勅賜興元閣碑』研究の現状と課題、2015年研究報告会「モンゴル史研究の新展開 II」、2016年2月26日、大谷大学、京都

Meishi Yamamoto, When was the Post-Relay System set up in Tibet by the Mongol Empire? Mongke Khan and Tibet during the 13th Century, The Fourth International Seminar of Young Tibetologists, 2015年9月7日、University of Leiptiz, Germany

松井太、カラホト出土モンゴル語文書に関する諸問題：ウイグル文書との関係を中心に、「モンゴル史研究の新展開 III」、2017年2月11日、龍谷大学、京都

村岡倫、『元史』食貨志歳賜・地理志から見るコルゲン・ウルスの変遷、2016年研究報告会「モンゴル史研究の新展開 III」、2017年2月11日、龍谷大学、京都

白石典之、帖里干道ルート復元のための現地調査報告、2016年研究報告会「モンゴル史研究の新展開 III」、2017年2月11日、龍谷大学、京都

21 矢島洋一、ムスリム史料におけるモンゴル高原、2016年研究報告会「モンゴル史研究の新展開 III」、2017年2月11日、龍谷大学、京都

22 山本明志、嶺北行省のスタッフと碑文資料、「モンゴル史研究の新展開 III」、2017年2月11日、龍谷大学、京都

〔図書〕(計3件)

矢島洋一、明治書院、知のユーラシア2 知の継承と展開—イスラームの東と西—、2014、総頁 227 (うち 45-69 を矢島が担当)

白石典之(編)、勉誠出版、チングス・カントとその時代、2015、総頁 374、同書 1-28 及び 45-52 を松田孝一担当、同書 53-85 を村岡倫が担当、同書 103-118 を松川節が担当

村岡倫、富谷至・森田憲司(編)、昭和堂、概説中国史、総頁 329 (うち 65-127 を村岡が担当)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田孝一 (MATSUDA Koichi)
大阪国際大学名誉教授
研究者番号: 70142304

(2) 研究分担者

松井太 (MATSUI Dai)
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号: 10333709

村岡倫 (MURAOKA Hitoshi)
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号: 30288633

白石典之 (SHIRAISHI Noriyuki)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号: 40262422

松川節 (MATSUKAWA Takashi)
大谷大学・文学部・教授
研究者番号: 60321064

矢島洋一 (YAJIMA Yoichi)
奈良女子大学・人文科学系・准教授
研究者番号: 60410990

中村淳 (NAKAMURA Jun)
駒澤大学・文学部・教授
研究者番号: 70306918

山本明志 (YAMAMOTO Meishi)
大阪国際大学・グローバルビジネス学部・講師
研究者番号: 70710937

(3) 連携研究者 (なし)

(4) 研究協力者

アヨダイ・オチル (Ayudai OCHIR)
モンゴル科学アカデミー国際遊牧文明学研究所・教授